（第２号様式）

神奈川県教育委員会教育長　殿

令和５年３月 31 日

県立希望ケ丘高等学校長
全日制の課程

令和４年度　学校評価報告書（目標設定・実施結果）

	視点	４年間の目標（令和２年度策定）	１年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価（３月８日実施）	総合評価（３月 31 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	①SSH の取組を充実させ、文理に関わらない問題解決能力の育成を図る。 ②令和４年度から年次進行で始まる新教育課程に向けて、生徒に最適な教育課程の編成を行う。	①コロナ禍で登校できない生徒に対し、オンラインを活用して学習を保障するとともに、教育活動の質の向上を目指す。 ②新教育課程の実施に当たり、すべての教員が「指導と評価の一体化」に関する理解を深め、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に努める。	①他グループと連携し、オンライン授業など ICT を効果的に活用した取組を職員全体で共有する。 ②職員研修を通じて、学習評価の改善について共通理解を図り、指導の改善に繋げていく。	①学校に登校できない生徒に対して、オンラインを活用して学習の継続を図ることができたか。 ②学習評価の改善による組織的な授業改善に取り組めたか。	①生徒の活動を継続しながら、授業時間の確保を行うことができた。また二期制になって一年目での問題点を速やかに検討し、他のグループと意見のすり合わせを行い、次年度の行事予定を作成することができた。 ②指導と評価の一体化に向けて、全日制・定時制を含めて職員研修会を開催することができた。	①評価を算出するシステムを作成し、観点別評価との関連付けを自動化することで事故防止を図る必要がある。 ②「指導と評価の一体化」に向けた研修会を行ったが、時期が遅くなったため、各教科で反映されていない状況が見えたので、来年度の早い段階で、再度研修を実施する必要がある。	①SSH の探究的な学びを活用して総合型選抜で希望する進路に進むことができた生徒がどのくらいいるのか。いるならばもっとアピールしたほうが良い。 ①SSH の取組で身に付けた力が、大学や企業でどのように役立っているのか、卒業生の声を聞いたらどうか。 ②文系理系問わず探究しているのはとてもよい。他の SSH 校との違いになっている。	①感染症等のため、学校での学習ができない生徒に対しても Teams を活用して、配信などの学習保障を行うことができた。 ②新教育課程が年度進行で実施され、生徒の進路実現に向けて、新しい評価方法についての理解を深めるために研修会などを通じて全体で共有することができた。	①様々な取り組み事例を共有し、コロナ禍で休校など、どんな状態になっても学習の継続性を図れるようにしたい。 ②新学習指導に伴う評価方法の改善について、さらなる情報共有を図るとともに、定期的に研修会を開催してより理解を深める必要がある。
2	生徒指導・ 支援	①生徒主体の生徒会活動を継続し、社会に貢献できる人材の育成を図る。 ②前４年間で構築した教育相談体制をさらに発展させる。	①すべての生徒が基本的な生活習慣を身に付け、充実した高校生活を送れるようサポートしていく。 ②特に支援の必要な生徒について職員間での情報共有を徹底する。	①各ホームルームで、Teams 等での一日の時程配信を推奨し、生徒が計画的に過ごすことができるような環境を整える。 ②「気になる生徒」の情報が常時記録され、必要な時にいつでも閲覧できるようファイルを管理する。	①遅刻や欠席する生徒数が減少し、生徒たち自身が計画的に学校生活を送ることができたか。 ②支援が必要な生徒に対するサポートに多くの職員で取り組むことができたか。	①日常生活、各行事において、生徒が安全・健康に生活することができた。合唱祭は３年ぶりの開催となり、生徒や職員の半数が過去を知らない状況であったが、生徒の主体的な活動により、立派な合唱祭となった。 ②学年団・養護教諭を中心としながら、支援を必要とする生徒への声掛けなどを継続し、年間を通しサポートすることができた。	①コロナ以前に生活が戻っていく中で、日常の時間の管理や行事での招待客への対応などを見直す必要がある。 ②問題を抱える生徒への早期対応、情報共有を学年と連携しながら進めていく。	②退学者数は他校と比べでどうなのか。どのような理由で進路変更しているのか。	①年間を通し、落ち着いた学校生活を送るためのサポートができた。各行事もコロナ前の状態に戻りつつある。来年度より時差登校がなくなるため、対応に戸惑う生徒への対応を適切に行いたい。 ②問題を抱える生徒の情報を共有し適切に対応した。	①基本的な生活習慣の確立のため、各学年、情報を常に共有し保護者との連絡を密にする。②令和４年度３年生の転出者は１名、令和３年度１年生の転学・退学者は４名、２学年は９名、県内公立高校中途退学者は令和３年度は 1,879 名。他校の数を知ることはできません。本校では不登校の理由は様々で、無気力・学業不振等が多い。引き続き、早めの情報収集と複数人数での適切な対応を心掛けたい。
3	進路指導・ 支援	①学習活動や SSH の取組をリンクさせ、大学入学者選抜改革に対応した進路支援体制を構築する。 ②自分の将来を見据え、妥協のない進路選択ができるよう、個別指導を充実する。	①生徒一人ひとりの進路に応じたキャリア支援に加えて、クラスや学年全体に対する支援の質と量の向上を図る。 ②質の高いキャリア教育を目指し、進路指導計画の見直しを行う。	①模擬試験の分析結果などを教員間で共有するだけでなく、生徒対象の分析会を実施し、自らの進路やキャリアを考える場としていく。 ②コロナ禍においても効果的に実施できるよう、進路指導計画について改善を進める。	①模擬試験結果の分析会が、自分の進路やキャリアについて考えるきっかけとなったか。 ②感染症対策として、様々なコンテンツなど ICT を活用した進路指導を実施できたか。	①学校推薦型選抜の選考を適切に行うことができた。 ①Teams を活用して、大学入学者選抜の情報を生徒・教職員に向けて、発信することができた。 ②LHR 等を利用して、模試の分析会や進路講話などを行うことができた。	①調査書などの出願書類の準備の仕方や段取りなどを見直す必要がある。 ②模試の分析会や進路講話をより効果的に行うために、実施時期の検討が必要である。 ②保護者向け進路説明会の開催方法の検討が必要である。	①進学重点校やエントリー校としての取組は様々である。希望ケ丘高校は一般選抜だけでなく、学校推薦型選抜や総合型選抜も含めた多様な選抜制度を活用する学校としてアピールしてよいのではないか。	①オンラインや対面形式により、模試の意義や今後の勉強方法、入学者選抜の方式を含めた受験情報などを教員だけからでなく、外部講師と連携して同じ方向性を持って指導をすることができた。今後も継続し、早期に自ら進路決定	①今後も外部講師と学校がより同じ方向性もって、指導に当たれるようにし、学校全体で同じ方向性を持って取り組める環境を構築していきたい。保護者説明会等で生徒に応じた入学者選抜について情報を発信していきたい。

	視点	４年間の目標 （令和２年度策定）	１年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 （３月８日実施）	総合評価（３月 31 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
									ができるようしていく必要がある。 ②様々なオンラインコンテンツを提示して、キャリア意識を高めようとしたが、多くの生徒はまだ自らの将来を考える時間が足りないと感じた。今後、キャリア教育をする中で将来の目標を見つけられるように働きかける必要がある。	②大学教員などによる対面やオンライン授業体験など、学校内で行える体験活動を模索していく必要がある。
4	**地域等との協働**	①家庭や地域、同窓会等の協働を進め、開かれた学校作りの更なる発展を進める。 ②SSH の活動において他の教育機関や地域との連携を進め、コンソーシアムの構築を進める。	①若い世代に共感されるような同窓会の活動の実現に、同窓会と協働して取り組む。また、家庭や地域に開かれた学校づくりの実績を積み重ねていく。 ②５年目のSSHの取組について地域社会等にPR していく。	①同窓会活動への理解を深めるために協働して活動の改善点を検討していく。 ②学校ホームページ、学校説明会、文化祭及び地域貢献デーなどの行事を通じて、地域の小中学校と連携したSSHの取組について発信する。	①同窓会との相互理解を通じた改善点の共有ができたか。 ②地域の小中学生との連携行事を実施したか。SSH の取組について活動状況をオンライン等で公開したか。	①学校説明会に関する予約において、スピード感を持って学校ホームページに掲載したことによって、周知徹底することができた。 ②今年度のSS科目で使用した教材を整理し、HP 上で公開し、普及に努めた。 ②課題研究を進める中で、普段の取組だけでなくまとめ発表の場においても Teams 等 ICT の活用を進めることができた。 ②SSH の取組の様子を随時 HP 等に公開した。	①２年ぶりに校外での学校説明会を行ったが、準備に時間を要してしまうことがあった。 ①学校説明会の説明において、生徒の説明が好評であったため、教員の説明と生徒の説明のバランスを考える必要がある。 ①地域の小中学校との交流において、SSH の取組との連携を一層強める工夫が必要である。 ②生徒が SSH の活動の成果発表する機会を校内外に拡充する必要がある。具体的には、文化祭において課題研究の成果発表をするなどの方策が考えられる。	①探究的な学びの発表会をもっと公開したらどうか。希望ケ丘高校の魅力が伝わっていないのではないか。もっと、小・中学校や地域に対しても取組を広めた方がよい。	②学校 HP による日々の取り組みの発信、１年間の教材の公開し、普及することができたが、小・中学校や地域への情報発信、や交流の機会を設定する必要がある。 ②ＩＣＴの活用は生徒・教員共に日常的に効果的に活用できたが、この取り組みを外部への情報発信に活用する必要がある。	②課題研究の取り組みなど、生徒自身発表の場を、校内外に設定する。具体的には本校の文化祭での研究発表や、校外に出向いて発表する機会を増やす。 ②日々の取り組みをデジタルポートフォリオにまとめるなどして、生徒の取組を外部に情報発信する仕組みを整える。
5	**学校管理 学校運営**	①働き方改革に向けて、コミュニケーションツールの活用など業務の効率化を図る。 ②社会から新たに要求される様々な教育ニーズに対応できる教員指導力の向上を目指す。 ② 生徒主体の学校行事等をさらに発展させ、課題発見・解決能力の育成を図る。	①BYOD 環境の拡充を行うとともに、Teams 等の活用を推進する。 ②各種の研修を通じて、教職員としての ICT 活用スキルを高める。 ②学校行事の際に、ICT 機器を積極的に活用していく。	①アクセスポイントの設置を円滑に行い、各教室の Wi-Fi 環境を強固にする。また、Teams 等の活用を推進し、校務に支障が生じない環境作りを行う。 ②様々な研修会を通して、人権や教育相談といった視点から、これまでの教育活動を見直す。 ②文化祭や陸上競技大会等で、Teams や Forms 等を活用し、ペーパーレス化や円滑な連絡事項を図っていく。	①各教室に充実した Wi-Fi 環境が整っているか。クラウドサービスの活用で校務が円滑に進んでいるか。 ②研修を通じて、職員の共通理解が深まったか。 ②Teams や Forms 等を活用し、連絡やアンケートがスムーズに行われたか。	①学校説明会や入選業務においても、Teams を効果的に活用することによりグループ内の連携がとれた。また、無駄な紙を使うことなく校務遂行できた。 ②BYOD 環境の整備を行い、学校の全ての場所において、通信環境が整うことができた。 ②ICT 機器の管理を定期的に行い、職員用の PC を一人１台割り振ることができた。また、突発的に職員が増えても対応することができた。 ②図書室に ipad を整備し、検索用等で活用する ICT 機器整備を行った。	①ICT に関する研修会を行ったが、参加者が少ない、研修後の職員の成果を検証することができなかった。 ②教室のプロジェクタ、スクリーン等の物品が故障した際の予備がないため、充実した機器の整備を目指す必要がある。	①ICT 研修の参加者が少ないとのことだが、OJT やマニュアルの充実などで、活用範囲が広がっていることを示した方がよい。 ②もっと全日制・定時制併置のメリットを生かしたらどうか。	①一人一台 PC の推進や BYOD 環境も整い生徒の利活用が深まるなか、教員への ICT 環境も充実し Teams 等の活用した働き方改革を進めることができた を推進する。 ②直面する課題が異なるが、全日と定時で共通する部分については合同の研修会を行うことができた。違った視点での取り組みが双方の利益となった。	①ICT に関する研修会をさらに充実させるとともに、研修後の職員の成果を検証する。 ②合同の研修を行う際の時間設定工夫やテーマの選定が必要である。必ずやるということではなく合同で行うことが合理的で成果が期待できるかの判断が必要である。